

ドクトル・ルイス・カルボ・マケナ病院における折り紙ワークショップの開催

令和7年（2025年）8月8日

7月24日、サンティアゴ首都圏州のプロビデンス区内に所在するドクトル・ルイス・カルボ・マケナ病院において、折り紙ワークショップを開催しました。

同病院は、癌治療をはじめとする様々な専門的診療を行っている国立小児病院であり、トロイ・センターと呼ばれる治療センターを有しています。このトロイ・センターには、広島で被爆した少女・佐々木禎子さんが白血病からの回復を願い千羽鶴を折ったという話になぞらえて、病気の回復を祈るシンボルである色とりどりの折り鶴が建物の中に飾られています。



今年8月、広島・長崎への原爆投下から80年の節目を迎えることから、禎子さんに縁のある同病院で、平和と希望のシンボルとなった折り鶴のワークショップを行う運びとなりました。

今回のワークショップには、子供達とその保護者のほか、ミチエル・ロジェル病院長を初めとした病院スタッフも含め約35人が参加し、チリ在住の折り鶴専門家・峰村芳春氏の指導のもとで折り鶴の折り方を学びました。参加者は、初めて触れる折り紙に最初は戸惑いながらも、綺麗な鶴を作ろうと真剣に取り組んでいました。



また、ワークショップの後半では、7月7日の七夕の伝統にちなみ「短冊」に願い事を書き、願い事が叶うように皆で協力してトロイ・センターの待合室に飾り付けました。



日本には古くから、折り鶴や七夕のように願いを形に託す文化があります。このような伝統文化を通じ、より多くのチリの皆さまに日本のことを知ってもらうと同時に、病気と闘う子どもたちに寄り添い希望の光を届けられることを願っています。

